

「日本音楽学会国際研究発表奨励金」受領者報告書

塚田 花恵

発表学会について

私は2013年の夏に、「1789～1914年のフランス語音楽批評 Francophone Music Criticism, 1789-1914」（以下 FMC と略記）が開催する国際研究集会に参加し、口頭発表を行いました。

この FMC という研究団体は、19 世紀フランスの音楽批評に関する研究プロジェクトを進め、定期的に国際研究集会を開催しています。FMC の運営は、ブリストル大学のキャサリン・エリス教授とサウザンプトン大学のマーク・エヴェレスト教授が中心になっており、現在、英国、フランス、米国を中心に 160 名以上の研究者と学生が参加しています。これまでに FMC は、19 世紀のフランスで書かれた音楽に関する批評記事をテーマごとに分けて収集し、批評文のデータをインターネット上で公開するといったプロジェクトを進めてきました。その成果は、例えば「1861 年の《タンホイザー》パリ公演」や「サン＝サーンスが執筆した記事（1872～74 年）」など、批評の対象となった公演や批評記事の執筆者ごとにまとめられており、公式ウェブサイト (<http://music.sas.ac.uk/fmc>) 上で閲覧することが可能です。FMC の国際研究集会は、2007 年から年に 1～2 回のペースで、ロンドン、パリ、モントリオールなどの欧米の都市で開催されています。また、FMC のメンバーが参加しているメーリング・リストでは、情報交換やディスカッションが常時活発に行われています。

8 回目となる今回の国際研究集会は、2013 年 7 月 2～3 日（火・水）に、パリのマレ地区にある「パリ市歴史図書館 Bibliothèque historique de la ville de Paris」の一室で行われました。今回の研究集会の発表者は 13 名で、全体の参加者は 30～40 名でした。そのうち、日本からの参加者は私を含めて 2 名でした。2 日間に組まれたセッションは、「外国への／からの眼差し」、「批評の規範と逸脱」、「批評の背景」、「作品の背景」、「連続と変化」、「批評のジャンルとコンテクスト」の 6 つで、合計で 12 の研究発表が行われました。1 人あたりの研究発表の時間は 15 分、ディスカッションの時間は 20 分でした。

研究発表要旨

私が発表を行ったのは、「批評の背景」（7 月 2 日 14:00～15:45）というセッションでした。最初に、スミス大学のピーター・ブルーム教授とフランス国立図書館のセシル・レイノー博士による「ベルリオーズの書簡と批評の接点」という共同発表がありました。

その次に私が発表を行い、最後にフランス国立図書館のマリ＝ガブリエル・ソレ博士による「記事が語らないもの、あるいは、行間の読み方——サン＝サーンスの著作」という発表がありました。

私の発表は、「1830年代における音楽作品の公的エピテクスト——『ピアニスト』誌（1833～35年）とピアノ作品レビューの出現 Public epitexts of musical works in the 1830s: *le Pianiste* (1833-35) and the emergence of piano music reviews」というタイトルで、博士論文の一部を報告しました。

私が研究の対象としたフランスの1830年代は、ベートーヴェンの交響曲が重要な演奏会レパートリーとなった時期であり、伝統的にオペラのジャンルを議論の対象としてきた音楽批評にとっては、器楽作品をいかに理解するかという問題に直面した時期でありました。音楽雑誌に掲載された出版譜のレビューは、作品と受容者を媒介するものであり、この時代における器楽作品の美的規範や受容のあり方を考察する上で、重要な研究対象であると考えられます。私はこの研究で、当時数を増しつつあったピアノ愛好家に向けて書かれた、ピアノ作品のレビュー記事に焦点を当てました。そして、器楽観が変化しつつあったこの時期のフランスにおいて、ピアノ作品レビューが読者にいかなる器楽受容の枠組みを提示したのかを詳らかにしました。

発表の前半では、まず、19世紀前期のフランスの音楽雑誌を網羅的に調査した結果を示し、1830年代になって音楽雑誌のレビュー記事のコーナーの多くをピアノ作品が占めるようになったという傾向を明らかにしました。そして、そのような1830年代の音楽雑誌の中で、『ピアニスト』という専門誌が、新譜を告知するだけでなく作品批評の要素も併せ持ったピアノ作品レビューを数多く掲載していたこと、そしてそのような試みが当時では新しいものであったことから、当時の読者に提示された器楽受容の枠組みを詳らかにするというこの研究にとって、重要な史料であることを主張しました。

後半では、この『ピアニスト』に掲載されたピアノ作品レビューの特徴と、その背景にあった執筆者の音楽観について、報告しました。この雑誌のピアノ作品レビューでは、チェルニーやショパンなどの同時代のピアノ作品・教則本に見られる名人芸的な技巧や独創的な和声などの要素が、批判される傾向にありました。『ピアニスト』の編集を行っていたとされる音楽教育家のシャルル・ショリユーは、この雑誌のなかで、18世紀末から19世紀初頭にかけてのフランスで活躍したデュセック等のピアニストたちを、フランスのピアノ音楽の「古典」として位置付けていました。ショリユーがデュセックの作品について特に高く評価したのは、「歌 chant」（声楽的な旋律）によって感情の優れた表現がなされている点でした。このことから、同時代のピアノ音楽に見られる名人芸的な技巧や独創的な和声などの要素が批判されたのは、背景に「歌」を重視する伝統

的な器楽観があり、それらの要素が「歌」を妨げるものとして捉えられたためであったことを、指摘しました。

質疑、反響と感想

ディスカッションの時間には、この雑誌における音楽のナショナル・アイデンティティの記述のあり方について、また、この雑誌の教育専門誌としての性格について、質問がありました。カリフォルニア州立大学のウィリアム・ウェーバー教授からは、19世紀にはドイツにおいてもデュセックが「教育におけるカノン作品」となっていたことを教えていただき、今後のリサーチの道筋が見えたことは、今回の大きな収穫でした。

国際的な場での研究発表は初めてだったので、発表の前はとても緊張しましたが、エリス教授は「ここは皆ファミリーのような間柄だから大丈夫」と声をかけて下さいました。実際に2日間参加してみて、FMCは非常にアットホームで温かい雰囲気の集まりだと感じました。会場には軽食とドリンクが用意されており、セッションの合間には他の参加者と気軽に話をすることができました。

この分野で世界的に著名な研究者たちが集まる会で、自分の関心を共有してもらえたことは、今後研究を進めていく上で励みになりました。この度の奨励金の授与に対して、住友生命保険相互会社と日本音楽学会に心から御礼申し上げます。